

平成29年3月31日

## 平成28年度文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門） 被表彰都市の決定について

文化庁では、このたび、平成28年度文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）の被表彰都市を決定しましたので、お知らせします。

### 1. 表彰の概要

文化芸術の持つ創造性を地域振興、観光・産業振興等に領域横断的に活用し、地域の特色を生かした文化芸術活動や社会課題の解決に、行政と住民との協働、行政と企業や大学との協力等により取り組み、特に顕著な成果をあげている市区町村に対し、文化庁長官が表彰する（平成19年度より実施）。

### 2. 被表彰都市

・江差町（北海道） ・足利市（栃木県） ・豊岡市（兵庫県） ・大分市（大分県）

### 3. 表彰状授与日

4月以降に実施予定（詳細未定）。

（担当）

文化庁長官官房政策課

課長 杉浦 久弘（内線2803）

課長補佐 土居 孝一（内線2804）

総務係長 三浦 牧人（内線2806）

電話 03-5253-4111（代表）

# 江差町（北海道）

## 【自治体のあらまし】

江差町は、北海道南西部の渡島半島西海岸に位置している。西側は日本海に面し、東側は緩やかな丘陵と低山が続いている。町域の中央を厚沢部川が横断して日本海にそそいでおり、居住地は海岸線と厚沢部川流域に連なっている。

江戸時代中期からニシン漁とヒバ材伐採で栄え、松前藩による交易の拠点港となり、「江差の五月は江戸にもない」と謳<sup>うた</sup>われるほどの繁栄を見た。

昭和30年2月に旧江差町と泊村が合併し、現在の江差町が誕生した。

江戸時代から商業で栄えたことから、現在でも第3次産業従事者が約75%を占めているが、厚沢部川流域の沖積平野で行われている米・大豆などの農業や、イカ・紅ズワイガニなどの漁業も見られる。さらに、江戸時代からの歴史文化を生かした観光振興にも力を入れている。

人口 8,046人（平成29年3月1日現在）

## 【文化芸術創造都市への代表的な取組】

江差町は、商家や蔵が残る町並み、民謡「江差追分」や「姥神大神宮渡御祭」をはじめとする文化、檜山郡という地名の基にもなったヒバの森など、数多くの有形・無形の文化遺産が保存伝承されており、それらが現在の生活にも密接に根ざしている。

「歴史を生かすまちづくり」では、行政が情緒あふれる個性的な町並みを再生するハード事業を行い、地域住民が町並み再生に合わせて様々なソフト事業を展開している。

また、江戸時代から伝承されている文化遺産を、住民が楽しみながらも観光や産業などの地域振興にも活用する取組も行われている。

このように地域に伝わる文化遺産を大切に保存して活用しながらまちづくりを進めており、老若男女が生き生きと暮らす町の姿がその魅力を高めている。

### ●歴史を生かすまちづくり事業

北海道が昭和63年からの「北海道新長期総合計画」で位置づけた戦略プロジェクト「歴史を生かすまちづくり」において、特に歴史的資源が集中している「中歌、姥神町一帯の旧国道沿い地区（通称「いにしえ街道」）」が、平成元年にモデル地区指定を受けて始まった事業。

江戸時代から形成されていた商家・蔵などの景観を生かした街道整備などの公共事業とともに、住民によって町民野外劇・手ぬぐい製作・語りべ活動など、地域の特色を生かした様々な取組が同時進行で行われた。

平成 16 年に街路事業が完成した後も、かつて行われていた花嫁行列を復活させるなど、住民の活動は発展しながら継続している。



いにしえ街道



語りべ活動



花嫁行列

### ●江差三大祭り

7月に開催する「かもめ島まつり」では、漁業者がニシン伝説にまつわる瓶子岩のしめ縄かざり架け替えや北前船競漕大会<sup>きょうそう</sup>を行うなど、豊かな自然や文化遺産を活用した催しを行っている。

8月に行われる「姥神大神宮渡御祭」は、江戸時代から続いている姥神大神宮の祭礼で、江差を離れた人たちも帰省して参加する。北海道の調査では約4億円以上の経済効果があると試算されている。

9月に開催する「江差追分全国大会」は昭和38年から行われており、平成28年の大会で54回目を数えた。海外から来る方も含めて約370人の参加者を数える。

これらは「江差三大まつり」と呼ばれ、地域の文化遺産が観光や産業などに横断的に活用されて地域振興に寄与している取組である。



かもめ島まつり



姥神大神宮渡御祭



江差追分全国大会

### ●ヒバ（ヒノキアスナロ）の育成

江差町には、国指定天然記念物に指定されている「ヒノキアスナロ及びアオトドマツ自生地」があり、ヒバ材は江戸時代から寺社や商家の建材に利用されていた。

近年はヒバ育成の取組として、民間企業などの支援も得ながら、児童・生徒を含む町民や観光客が、「町民の森」や文化財修復に充てるために設けられた「檜山古事の森」でヒバ苗の植樹を行っており、その数は約1万本に達している。



ヒバ苗植樹の様子

# 足利市（栃木県）

## 【自治体のあらまし】

足利市は、栃木県の南西部に位置しており、北部には足尾山地、南部には関東平野が広がり、中央に渡良瀬川が流れている。大正10年に市制を施行して足利市が発足し、その後、近隣町村の編入を経て現在に至る。

古くから織物のまちとして知られているが、近年はアルミや機械金属、プラスチック工業などを中心に、総合的な商工業都市となっている。

人口 148,133人（平成29年3月1日現在）

## 【文化芸術創造都市への代表的な取組】

足利市民会館、足利市民プラザを中心とする長年にわたる着実な芸術文化普及活動や市民参加型の創造事業に加えて、平成25年には市民会館専属のプロフェッショナル芸術団体（オペラ、ミュージカル、オーケストラ）を立ち上げ、これらによる活動は市域内での公演やアウトリーチ活動だけでなく、近隣地域へ波及した活動に広がりつつある。また、映像のまち構想プロジェクトにより、市民が映像を身近に感じ、楽しみながら積極的に参加できる取組を進めている。

### ●文化によるまちづくり

平成12年6月に、日本最古の学校といわれる足利学校や、室町幕府を創設した足利氏ゆかりの館跡であるやかた鏝阿寺ばんなじなどの貴重な歴史遺産を未来に継承するとともに、市民生活との調和を図りながら個性豊かな魅力あふれるまちづくりを進めることを内容とする歴史都市宣言を行った。



日本最古の学校「足利学校」

平成23年3月には、「足利市歴史文化基本構想」を策定し、周辺環境も含めて地域の文化財の総合的な保存と活用に取り組んでおり、中でも市内に数多く残る文化財を一斉に公開する「文化財一斉公開」事業には、毎年市内外から多くの見学者が訪れるなど、歴史と文化のまちとしての魅力ある事業を積極的に推進している。

足利市民会館では、文化芸術による現代版「足利学校」創造プロジェクトを発足し、市民ミュージカルやユースオーケストラに係る取組、さらには伝統芸能の継承・普及など、市民文化の醸成や人材育成、地域交流を通してのにぎわい創出を推進している。

## ●市民会館専属のプロフェッショナル芸術団体の発足

長年にわたり、優れた舞台芸術の鑑賞・体験機会の提供や市民参画創造事業に取り組んできた足利市民会館において、平成25年5月に「足利 ミュージカル」、「足利カンマーオーケスター」、「足利オペラ・リリカ」という3つの専属プロフェッショナル芸術団体を発足させ、定期公演、市内学校向けの芸術教室・芸術鑑賞会や部活動指導、福祉施設等におけるアウトリーチ活動等を行っている。

また、それぞれの部門において、足利学校に倣い「学びの視点」を取り入れ、人材養成のための研究科を開校し、継続的な研修カリキュラムを設けている。



足利オペラ・リリカ  
のアウトリーチ

### <専属団体の定期公演>



足利ミュージカル



足利カンマーオーケスター



足利オペラ・リリカ

## ●映像のまち構想プロジェクト

“映像”というコンセプトをまちづくりの基軸に盛り込み、多彩なプロジェクトを官民一体となって実施することにより、市民意識への浸透を図り、風土や文化として息づかせるとともに、観光誘客や経済活性化を目指している。

足利市出身者やゆかりのある映像関係者等による「足利銀幕会議」を開催し、提言や事業参画を得ながら各事業に取り組んでいる。映画、ドラマ等のロケーション誘致に加えて、市域で撮影された映画の上映会（「あしかが映像まつり」）や参加・体験型のワークショップ等、多くのイベントを開催している。



途切れることのない撮影隊  
監督・スタッフも常に真剣勝負！

# 豊岡市（兵庫県）

## 【自治体のあらまし】

豊岡市は、平成17年に1市5町（豊岡市、城崎町、竹野町、日高町、出石町、但東町）が合併したことにより、人口8万人強、兵庫県内で最も面積が大きい自治体となった。市域の約8割を森林が占める豊かな自然環境に恵まれ、半世紀以上に渡りコウノトリの野生復帰に取り組んでいる。

全国的に有名な城崎温泉を始め、西日本屈指のスキー場である神鍋高原スキー場、但馬の小京都と名高い出石城下町を有し、年間の観光客は400万人を超える。地場産業としては、国内最大産地のかばんや出石焼の生産が行われている。

人口 83,832人(平成29年2月28日現在)

## 【文化芸術創造都市への代表的な取組】

少子高齢化による人口減少や、合併後の文化的アイデンティティの形成という課題を有しているが、ローカルで固有な文化資源を再発見し、文化芸術を媒介とすることにより、新たな文化の創造・発信を図り、「小さな世界都市」を目標とした文化政策を展開している。

文化芸術による地方創生の中核拠点として、平成26年4月には「城崎国際アートセンター」を開設し、同施設や豊岡市民プラザ、出石永楽館なども活用しながら、「豊岡アートシーズン」、「豊岡エキシビジョン」をはじめとする地域の個性を輝かせることを目指した事業を広く展開している。また、演劇的な手法を取り入れたワークショップ型、双方向型のアクティブラーニングを用いたコミュニケーション教育を推進している。

### ●城崎国際アートセンター

平成26年にオープンした舞台芸術を中心とした「アーティスト・イン・レジデンス」の拠点施設で、城崎温泉街に位置する。1つのホール、6つのスタジオ、22名が滞在可能なレジデンスで構成され、公募を経て選考された世界中のアーティストやカンパニーが滞在制作を行う。滞在期間中には無料の地域交流プログラムを実施し、市民との交流を図る。

豊岡市の未来を担う子供たちが、制作過程も含めて世界の最先端のアートに触れ、豊かな想像力を育み、「小さな世界都市」を創造する主体となることを目指している。



城崎温泉ダンス旅+ダンサーを探せ！

in 城崎温泉の様子

(2015年10月 ©igaki photo studio)



城崎国際アートセンター外観・ホール ©西山円茄

### ●出石永楽館の再生

平成 17 年に合併した旧出石町にある近畿最古の芝居小屋であり，明治 34 年の開設時から歌舞伎，新派劇，寄席等を上演し，但馬地域の大衆文化の中心として人々の娯楽の場ともなっていた。

昭和 39 年にいったん閉館したが，住民による復原運動が展開され，平成 20 年に市による大改修が完了した。これにより，舞台機構が最も充実していた大正期の姿に復原され，多くの住民が伝統芸能や芸術文化に親しんでいる。

出石城下町地区は市の景観形成重点地区（63.2ha）に指定されており，その中心部（23.1ha）は平成 19 年に国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定され，行政・住民・関係団体が一体となって，歴史ある城下町を活かしたまちづくりに取り組んでいる。



出石永楽館 内観



永楽館歌舞伎公演中の外観

### ●豊岡アートシーズン 2016

平成 28 年に，市内の様々な文化・観光資源を通じて豊岡の魅力を再発見することを目的として始められたアートフェスティバル。

7 月から 11 月までの期間中は，市内の文化施設において，ダンス，演劇，コンサート，展覧会など多様なプログラムが展開され，訪れる人々に豊岡が誇る文化芸術との出会いを促す取組となった。



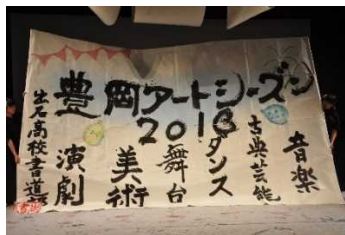
ロゴマーク



豊岡アートシーズン 2016

キックオフイベント

「とよおかアート縁日」の様子



「とよおかアート縁日」で

行われた地元高校生による

書道パフォーマンス

# 大分市（大分県）

## 【自治体のあらまし】

大分市は、縄文時代から現在まで、瀬戸内ルートを主幹とした「海の道」を媒介に歴史を刻んだ東九州の要地であり、1300年にわたり、地理的にも歴史的にも県都として大きな役割を担ってきた。中世・戦国時代には、北部九州6国を治めた戦国大名大友宗麟の下に隆盛をきわめ、最盛期には世界にも名が知られる国際貿易都市「豊後府内」となった。これに伴い、西洋の医術、音楽、演劇などを取り入れ、我が国独自の「南蛮文化」が全国に先駆け大きく花開いた。さらに、高度経済成長期には、臨海部を拠点に新産業都市として、鉄鋼、石油化学、銅の精錬など重化学工業を中心に発展を遂げ、近年ではIT関連企業が進出するなど様々な産業が集積している。

人口 479,446人（平成29年2月28日現在）

## 【文化芸術創造都市への代表的な取組】

平成26年6月に「大分市文化・芸術振興計画（2020わくわく大分 文化・芸術ゆめプラン）」を策定。この計画は、「人とまち文化・芸術で輝く大分市」を基本理念とし、3つの基本目標（「心豊かな市民生活を実現する文化・芸術の振興」、「郷土を愛する心や一体感を醸成する文化・芸術の振興」、「賑わいを創出し地域経済を活性化させる文化・芸術の振興」）を掲げ、その実現に向けて4つの施策の方向性（「したしむ」、「はぐくむ」、「ささえる」、「つなぐ」）を示し、各種事業に取り組んでいる。

平成25年に開館した新たな文化・芸術拠点「ホルトホール大分」において人材育成や交流促進を推進するとともに、「おおいたトイレナーレ」、「宝のまち・豊後FUNAI芸術祭」、「おおいた夢色音楽プロジェクト」など多様な文化芸術イベントを展開している。

### ●アートを活かしたまちづくり事業「おおいたトイレナーレ2015」

アートの持つ創造性を地域活性化や産業振興に活かす取組として平成27（2015）年度に「トイレナーレ」を開催。

「トイレナーレ」とは、3年に一度開催されるアートフェスティバルを指す「トリエンナーレ」と、街中の空間に欠かせない「トイレ」を組み合わせた造語であり、「アートを活かしたまちづくり」を目指し、トイレのみを舞台・テーマとした作品を展示した。

「まちなかアートイベント」や「まちなか体験イベ



トイレナーレ 2015 作品：  
メルティング・ドリーム

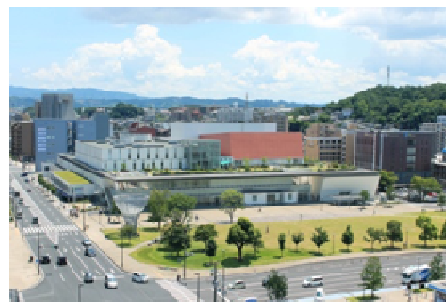


ント」等，作品を見ながらまちを巡ってもらうための様々な取組を行い，訪れる人々に驚きや感動を提供した。来場者数は18万人を数え，経済波及効果も4億円以上と算出されている。

### ●ホルトホール大分

市民が集い，学び，憩い，賑<sup>にぎ</sup>わい，交流する情報文化の中核施設として，平成25年にJR大分駅の南側に開館した。施設内部に市民ホールや図書館，会議室，子育て交流センター等を有し，文化，福祉，健康，教育，情報，産業，交流にぎわいの7つの機能を備えた多機能型複合施設である。

周辺にはグランシアタ，大分市美術館等が集積しており，それらの周辺施設とも機能連携し，中心市街地の活性化を図りながら，人材育成や交流促進といった多彩な事業を展開している。



ホルトホール大分

### ●おおいた夢色音楽プロジェクト

「おおいた夢色音楽プロジェクト」は，「おおいた夢色音楽祭」，「ふるさとコンサート」，「どこでもコンサート」，「いかした大人たちのバンドフェス」というコンセプトが異なる4つの事業により，日本における西洋音楽発祥の地といわれる大分市において，年間を通して音楽があふれる「音楽のまち大分」を実現するため，鑑賞・参加・



おおいた夢色音楽祭 2016の様子

育成型の音楽イベントを開催。  
「おおいた夢色音楽祭」は平成28年に9回目の開催を迎え，大分市の秋の風物詩となっている。大分駅周辺や大分市中心市街地の各商店街，公園など，まちなかのストリートステージで，県内外から集まった1,000人を超えるミュージシャンが演奏を繰り広げている。

### ●宝のまち・豊後FUNAI芸術祭

「宝のまち・豊後FUNAI芸術祭」は，16世紀半ば日本でいち早く「南蛮文化」が花開いた大分市の歴史・文化的資源に光を当て，文化・芸術の持つ創造性を地域活性化に活かすことを目的に平成27年度から



ホール事業(左)とにぎわい事業(右)の様子

開催。大分市の文化施設各館（ホルトホール大分・コンパルホール・平和市民公園能楽堂）の持つ特性を活かした公演や催しを行う「ホール事業」や，中心市街地でのにぎわい創出を目的とした文化・芸術イベントを行う「にぎわい事業」を実施している。

平成28年度文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）選考委員名簿

【選考委員】

- |        |                        |
|--------|------------------------|
| 磯田 憲一  | 公益財団法人北海道文化財団理事長       |
| 小林 真理  | 東京大学大学院人文社会系研究科教授      |
| 志賀野 桂一 | 白河市文化交流館コミネス館長・プロデューサー |
| 野田 邦弘  | 鳥取大学地域学部地域文化学科教授       |
| 藤野 一夫  | 神戸大学大学院国際文化学研究科教授      |
| 藤原 恵洋  | 九州大学大学院芸術工学研究院教授       |
| 松本 茂章  | 静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科教授   |